

# 内田隆英の原点

## 大阪で働き、両親に仕送り

小さいころから耳が不自由で心ない言葉で差別されたこともありましたが、明るく頑張ってきました。

高校卒業後、大阪で働き、手取り7万円だった当時、「またも来ました給料日」という手紙とともに両親に毎月3万円を送金していました。



## 地元にもどり、両親を支え

地元に戻ると両親は体が不自由でした。妻が夜勤のときは、家事を引き受けて、家族で支えあいました。「立場の弱い人たちに優しく」という姿勢は、いまも変らぬ姿勢です。

## ペーロン大会を復活

伊王島に帰ってから現在も消防団に所属(市副団長)。ペーロン大会を地元の青年たちと力を合わせて復活へ。地域の支え合い、伝統と文化を大切にしたい...これが住民に接する原点です。



## 消防団勤続45年で県民表彰



内田さんは「消防団は、市民の生命・財産を守るために活動するので誇りを持っています。政治家に通じるものがあります。暮らしの守り手として頑張ります」と語ります。

新しい長崎駅の改札口までの距離が長くなり、歩行が困難な高齢者などが困っている話を聞きつけ、議会で取りあげ、途中に休憩用のベンチが設置へ。また、市民会館文化ホールトイレの洋式化も(写真)。「誰ひとり取り残さない社会」の実現へ、これからも頑張ります。



## 誰ひとり取り残さない社会へ 困っている人を見過ごせない

内田さんは、被爆体験者の声を聞き、「被爆体験者も被爆者と認めよ」と何度も厚労省と交渉(写真)。「政府は核兵器禁止条約に参加せよ」と訴え続けてきた内田さんは、「日本を再び戦争をする国にしない」と、決意を新たにしています。



## 核兵器禁止条約にサインする政府を 「被爆体験者も被爆者」と繰り返し求める

高すぎる国保税の負担軽減を求め、就学前の子どもの国保税の均等割の減額が昨年度から実現しました。内田隆英さんを団長とする日本共産党長崎市議団は、新型コロナ対策として、PCR検査の拡充、保健所機能の強化、事業者支援策の拡充を繰り返し要求。抗原検査センターやドライブスルー式発熱外来が開設されました。

## 命とくらしが最優先の政治を 国保税の負担軽減、コロナ対策

## 地方議員30年 いつも「住民こそ主人公」の立場で 内田隆英



核兵器禁止条約2周年の日に 2023年1月



台風災害の救援募金活動 2019年10月



「政府は核兵器禁止条約に参加せよ」と訴える(左端が内田さん) 2020年8月



市営アパート火災現場の調査を元に質問 2021年11月